

野の花を見るには時間が必要です

大学宗教センター長 栗原 健

²⁵「だから、言っておく。自分の命のことで何を食べようか何を飲もうかと、また自分の体のことで何を着ようかと思ひ悩むな。命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切ではないか。
²⁶ 空の鳥をよく見なさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、倉に納めもしない。だが、あなたがたの天の父は鳥を養ってくださる。あなたがたは、鳥よりも価値あるものではないか。²⁷ あなたがたのうちだれが、思ひ悩んだからといって、寿命をわずかでも延ばすことができようか。²⁸ なぜ、衣服のことで思ひ悩むのか。野の花がどのように育つのか、注意して見なさい。働きもせず、紡ぎもしない。²⁹ しかし、言っておく。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。³⁰ 今日は生えていて、明日は炉に投げ込まれる野の草でさえ、神はこのように装ってくださる。まして、あなたがたにはなおさらのことではないか、信仰の薄い者たちよ。³¹ だから、『何を食べようか』『何を飲もうか』『何を着ようか』と言って、思ひ悩むな。³² それはみな、異邦人が切に求めているものだ。あなたがたの天の父は、これらのものがみなあなたがたに必要なことをご存じである。³³ 何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる。³⁴ だから、明日のことまで思ひ悩むな。明日のことは明日自らが思ひ悩む。その日の苦労は、その日だけで十分である。

マタイによる福音書 6 章 25－34 節

最近メディアで言われるようになった言葉に「タイパ」というものがありますが、ご存知でしょうか。「タイム・パフォーマンス、時間対効果」の略称で、費やした時間に対して得られる効果のことを指します。同じ効果を得られるのであれば、物事にかかる時間をなるべく節約しよう。その分、多くのことを行って生産性を高めたい。この「時間効率」の思考がタイパです。

例えば、映画などは早送りで見、興味がない部分は飛ばして見る。授業の動画を見る時でも、倍速で見る。半分の時間で済ませて 2 つ見たほうがいい。そのように考える若者が最近増えていると、メディアでは報じられています。マルチタスクで一度に複数の作業をすることも、これに入るでしょう。手持ちの時間は限られているのだから、最大限節約して多くのことをしたい。そうしたタイパ重視の傾向が、学生の間にも広がっているようです。

時代は変わったものですね。私が学生だった頃には、授業が終わると部活の部室に行き、仲間たちと長々と無駄話をした挙句、「今日この後なんかあるかァ」「特に

ねえよ」 「じゃあ学食に行こうか」 となる、まるで落語の与太郎の集団のような感じで、無尽蔵に時間があるかのように振舞っていました。時間対効果を気にする若者の話などを聞きますと、まさに隔世の感。少しは見習わなくてはと思います。

しかし、ここで1つ疑問も感じます。タイパということは、果たしてどれだけ有効なのでしょうか。

時間というのは不思議なもので、急ごう、節約しようとすればするほど、なぜか足りなくなります。時間をセーブすれば、その分だけ後でのんびりできるはずなのですが、どういわけかのんびりできたためしが無いのです。

急げば急ぐほど、やらなくてはいけないことが増えて行き、かえって時間に追われる。「急ぐと時間が 逃げていく。急げば急ぐほど 時間は 消えていく」(葉祥明『急がない』日本標準、3 頁)。そのためにストレスがたまり、せっかくセーブした時間をスマホをドラダラ見るのに使ってしまう。そういうことは無いでしょうか。

さらに、タイパのことを気にしていると、何故か集中力が無くなります。例えば、マルチタスクで時間を節約しようとする、自分が今していることに集中できなくなり、先のことばかりが気になってしまうということがあります。作業を仕上げて、どうも達成感がない。沢山のことをしているのに頭に残らない。ただ済ませているだけ。そのために、ますます時間が足りないような気がしてしまいます。

私たちが小さな子どもだった時のことを思い出すと、決してこうではなかったですね。あの頃は実に時間がゆっくりと流れていました。夏休みは今の1年ぐらいに感じられたと思います。あれはなぜなのでしょう。それは多分、子どもは今自分がしていること、見ていることに意識をがっちり集中させているからでしょう。1つの時に1つのことだけ集中している。だから時間がゆっくり感じられるし、それぞれの体験が鮮明に心に残るのです。

私たちは、時間のことを気にするあまりに、こうした自分を見失っているのではないのでしょうか。いつも先のことばかりを考えていて今の時間に生きていないから、何をしても心に残らない。そのような感じがします。

マキシミアン・コルベ(1894 年～1941 年)という人をご存知でしょうか。ポーランドのカトリック神父で、戦時中にアウシュヴィッツ収容所で他の囚人の身代わりとなって死んだことで有名です。1930 年から 36 年まで長崎で司牧活動をするなど、実は日本とも縁が深かった人物です。

このコルベ神父は 20 代の頃、あるラテン語の格言を大切にしていたようで、日記の中に何度かその言葉を書いています。その言葉とは「Age quod agis アゲ・クゥォド・アギス」というもので、直訳すると、「今、していることをなせ」という意味になります(参考:『コルベ神父の霊的メモ』聖母の騎士社)。コルベ青年は、将来について思い煩ったり気持ちちが乱れている時には、この言葉をノートに書いて心を引き締めていたようです。

通常、この「アゲ・クゥォド・アギス」という言葉は、「あなたの本分を尽くせ」とか「好

きなことをとことんやれ」といった意味で理解されることが多いです。それでも良いのですが、文法上そのままの意味、「今、していることをなせ」という言い方も、実に深い味わいがあるのではないのでしょうか。

私たちは多くの場合、心がどこかに行ってしまい、「今、していること」をしていません。そのために、多くのことをやっているはずなのに満たされず、先のことばかりが心配になり心が乾いてしまっています。大人がこのような感じだから、若者たちも先のことが不安になり、とにかく多くのことをしなければと右往左往しているのではないのでしょうか。

コルベ神父のような多くの実を結んだ人が、若者であった時に、「今、していることをなせ」のひと言を胸に刻み、常にその点に自分の心を引き戻すようにしていた。このことは、時間に振り回されている私たちに、大切なことを思い出させてくれます。

以上のようなことを念頭に、今日の聖書箇所を見てみると、何が見えて来るでしょうか。イエスは、「空の鳥を見なさい」「野の花がどのように育つのか、注意して見なさい」と言われますが、私たちが最近、空の鳥を見上げたり、花を見つめたのは、いつのことでしょうか。もしかしたら、ずい分前のことかも知れません。

イエスはここで、私たちに心の目を自然へと向けるようにと呼びかけています。なぜなら、そこには神の愛が映し出されているからです。神は野の鳥に食べ物を与え、小さな花ですらも、文明の栄華よりも美しく飾って下さる。まして、神はあなたがた一人ひとりをそれ以上に愛して下さり、価値あるものと見て下さっているではないか。そうイエスは言われるのです。

この言葉を読む時、私は、ある学生が書いた言葉を思い出します。彼女は、心が疲れている時、生き辛く感じる時には、森など自然が沢山あるところに行くということです。そうすると、「自分は、自分のままでいいのだ」という気持ちになり、安心できるとのことでした。

この学生の感性は、非常に深いものがありますね。彼女は、神の愛を受け取って生きている自然から、「あなたも、あなたのままですでに愛されているのだよ」という語りかけを感じ取っているのです。

残念ながら、私たちの社会の状態は、そのような姿から遠く離れています。多くの人々は、自分自身ではなく自分以外の誰かになろうとし、他人の声に一喜一憂して、「自分は生産的な人間なのだ」ということを証明しようと躍起になっています。タイパの話も、そこから来ていると言えるでしょう。

大人たちがこのような状態であれば、若者たちもそれに倣ってしまいます。「自分が自分であるという素朴なことが、とても難しくなってきたように感じます。私たちは自分であろうとしながら、いつも自分と誰かを比べています。」(若松英輔『いのちの秘儀』亜紀書房、82頁) これは多くの若者たちの実感でもあるでしょう。

そんな私たちに対して、イエスは、「待ちなさい。立ち止まって空の鳥、野の花を見てください。あなたが神にどれほど愛されているかを思い出し、まずあなた自身を取り戻しなさい」と言われるのです。そのように立ち止まって自分自身を取り戻す時を持つ

ことは、現代のようなスピード社会においては、心の死活問題と言ってよいでしょう。

毎日の生活の中で、あえてタイパのことを脇に置いて静まる時を持ち、世間の声に流されないようにする。礼拝もそのような時間です。「多くのことをして人々の評価を得て回るよりも、大切なことがある」「自分が本当になすべきことは、何なのだろうか」「自分の軸足は何か」。聖書の言葉を聞きながら、そのように時間をかけて考えを深めて行くことは、神から与えられた人生を豊かに生きて行くために、どうしても必要になります。

このような場を用意し、若者の心を導いて行くことが、神の愛によって生かされているキリスト教主義の学校教育、本当の意味で人間として生きることを教える教育ではないでしょうか。自分の道を見出して「今、していることをなす」深味のある人間を育てて行くことができるよう、神の恵みと導きを祈り求めて行きましょう。

(2022 年 11 月 2 日)